



奈良文化財研究所創立 50 周年記念 公開シンポジウム

『古代建築研究の新たな展開』

奈良文化財研究所が1952年に創設されて以来、一貫して研究を積み重ねてきたテーマに、古代建築の研究があります。建造物研究室を中心として、考古学、歴史学、保存科学、文化財修理などの各分野との連携を密にとりながら、古代建築についての総合的な研究に取り組んできました。ここしばらくは、古代建築の解体修理が一段落したこともあり、古代建築研究は停滞気味であると考えられるようになっていましたが、近年、阪神淡路大震災を契機とする構造力学的解析の重視、年輪年代学による木材伐採年の特定などの科学的手法の導入、史跡における古代建築の復原事業にともなう仕様・施工レベルに踏み込んだ検討などの展開により、古代建築が新たな像を結びつつあります。本シンポジウムは研究所創立50周年を記念し、近年の古代建築研究をめぐる動向を集約して今後の研究の進むべき道を考える目的で開催されました。



シンポジウム総合討議の様子

秋深まる2002年11月9日、奈良県新公会堂において、奈良県内に留まらず全国各地から約220名の方々にご参加いただきました。

シンポジウムでは、次の7名による報告がおこなわれました。

古代建築研究の新たな展開 清水真一（奈文研）

古代建築の力学的性状と構造診断 今西良男（奈良県教育委員会）

出土瓦による屋根景観の復原 上原真人（京都大学）

年輪年代学からみた新たな課題 光谷拓実（奈文研）

復原設計から読む古代建築 清水重敦（奈文研）

発掘現場からの問いかけ 長尾 充（奈文研）

近年の古代建築修理から 松田敏行（元奈良県教育委員会）

古代建築の研究は、儀式などによって建築の用途・機能を考えていく研究など、この他にも成果があがりつつあり、本シンポジウムの報告はもとよりすべてを網羅するものではありませんが、ものに即した研究の面で際だった成果がみられる領域を一覧することで、古代建築研究に新たなスタートラインを与えることができたと自負しております。また、会場から構造診断の問題、年輪年代学による成果、復原事業の方法などについて、予想を上回る多くの質問、感想が出され、このテーマに寄せられる期待の大きさが強く感じられました。

古代建築の魅力は、それが常に我々の想像力をかき立て、新たな研究の開拓へと向かわせてくれるところにあるといえるでしょう。しかしながら、研究所も創立50周年を迎え、古代建築を研究することの意義をあらためて問い直すべき時期にきています。現時点での研究の展開を整理した本シンポジウムは、現代に生きる我々と、古代建築ないし古代という時代との間の関係を新たに結び結ぶための第一歩にほかなりません。（文化遺産研究部 清水重敦）